

歴史と場所

——過去認識の歴史地理学——

米 家 泰 作

一 はじめに

近年、歴史意識ないし過去認識の歴史、あるいは社会的な「記憶」の歴史が論じられる際、そこに付随する空間的な様相が盛んに論じられるようになってきた。例えば歴史学では、P・ノラ編の『記憶の場』が、フランスという空間的なアイデンティティの歴史を問うと同時に、風景や記念建造物、領土や遺産、地方文化や名所といった具体的な地域や場所の「記憶」がいかに形成され、そして争われたかを論じている^①。また、建築学者D・ハイデンの『場所の力』は、場所を「記憶の源泉」と位置づけ、都市景観が帯びるパブリック・ヒストリーの意義をひろく論じてみせた^②。さらに社会学でも、歴史的景観の保存をめぐる議論が多くなってきた。こういった諸研究は、歴史意識あるいは過去認識と呼ばれるものの多くが、実は特定の場所にまつわる歴史であり、空間の記憶でもあることを如実に示すとともに、特定の景観や地理をめぐる歴史的な心性が、様々な分野において重要な課題として認められるようになったことを、よく表している。

過去の空間ないし地理の復原を行う歴史地理学者にとって、このような問題意識は、ある意味、非常に馴染み深いものであった。というのも、景観復原や領土問題、観光地の形成といった研究テーマに取り組む歴史地理学者にとって、具体的な景観や地理的空間のなかに歴史を見いだそうとする心性は、自身に内在するものだからである。歴史意識と一体とな

った場所の感覚、あるいは時間と空間を不可分のものとして意識する歴史地理的な心性こそが、歴史地理学者の研究の源泉であり、原動力となってきたと言つてよい。このような感覚あるいは心性それ自体を、歴史地理学者たちが研究対象として意識し、過去に遡つて考察し始めたのは、一九七〇年代後半のことであつた。

その嚆矢は、一九七五年のD・ローウエンタールの論文、「過去の時間、現在の場所——景観と記憶——」である。^④この論文は、景観ないし場所とは、「過去」が選択的に示される場であつて、時には「過去」が改変あるいは創出される場であることを指摘するものであつた。ローウエンタールはその後、この主題をことさらに地理学に限定して位置づけることに専念するよりも、様々な表象にあらわれた「過去」とその利用のあり方に関心を拡大していったが、^⑤少し遅れてD・ハーヴェイが、一九七九年の論文「モニュメントと神話」において、^⑥記念碑的建築物に付与されたパリ・コミュニケーションの意義とそれをめぐる争いを論じてみせた。また同じ年にR・M・ニューカムが、「可視的な過去」としての歴史的景観の保存を包括的に論じている。^⑦しかし、彼らが示した過去の認識をめぐる問題意識が、英語圏の歴史地理学において本格的に開花したのは、一九九〇年代になってからだといえる。^⑧

その背景には、「過去」を示す景観や場所とは、単に過去が保存され、映し出される場ではなく、現在の文脈のなかで「過去」が創出され、その内容が争われる社会的構築物であることが、歴史地理学者の間で理解されるようになったことが大きい。このような問題意識から、特に英語圏の歴史地理学界では、記念碑や追悼碑、戦没者墓地やパレード、ヘリテージ（遺産）の場や農村風景、博物館や紀行文といった実に多様な研究対象と、そこに込められた過去の認識が、模索的に報告されつつある。それは現在のところ、社会・文化・政治地理学の議論や、歴史学をはじめとする他の様々な分野の議論を熱心に摂取する途上にあり、研究対象に関しても、問題意識に関しても、複雑な様相を呈している。

しかし例えば近年、歴史地理学の入門書、『モダニティの歴史地理』^⑨が、「現在における過去のポリティクス」を同書の基本的な主題の一つとして位置づけ、特に終章を景観と過去の解釈との関係の議論に宛てたように、^⑩またA・R・H・ベ

イカーが近著『地理学と歴史学』において「景観における記憶とアイデンティティ」のために一節を割いたように、このような潮流がすでに一つの問題領域として認知されていることは間違いない。また日本においても、少数ながら千田稔をはじめとする歴史地理学者の研究例や、これに並行する他分野の議論が、独自に展開していることは見逃せない。

小稿での筆者の目的は、こういった過去認識に関わる歴史地理学について、主に一九九〇年代以降の動向の概観と整理を試み、一つの問題領域として示すことにある。その際、ゆるやかながらも議論の共有が進んでいる英語圏の動向を主として紹介しながらも、筆者自身の関心の中心は日本の歴史地理にあるという理由から、適宜、日本の研究例と比較しつつ、歴史地理学者の強調点と今後の課題を取り出していきたい。また概観の手順としては、「過去」を表象する媒体として景観を位置づけた諸研究にまず注目し(二章)、次いで景観以外の様々な表象に込められた「過去」へと議論を拡げていくこととしたい(三章)。

- ① ビエール・ノラ編(谷川 稔監訳)『記憶の場——フランス国民意識の文化Ⅱ社会史——』、岩波書店、二〇〇二—〇三年。
- ② ドロレス・ハイデン(後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳)『場所の力——パブリック・ヒストリーとしての都市景観——』、学芸出版社、二〇〇二年。
- ③ 例えば、片桐新自編『歴史的環境の社会学』、新曜社、二〇〇〇年。
- ④ D. Lowenthal, Past time, present place: landscape and memory, *Geographical Review*, 65, 1975, pp. 1-36.
- ⑤ D. Lowenthal, *The Past is a Foreign Country*, Cambridge University Press, 1985. なおローウエンタルと考古学者の協業の成果である P. Gatherole and D. Lowenthal eds., *The Politics of the Past*, Unwin Hyman, 1990 を参照。
- ⑥ D. Harvey, Monument and myth, *Annals of the Association of American Geographers*, 69, 1979, pp. 362-381. [佐藤こいち・太田雅子訳]
- ⑦ 「モノメントと神話」(千田 稔編訳)『地図のかたに——論集 景観の思想——』、地人書房、一九八一年)二二六—二七二頁
- ⑧ R. M. Newcomb, *Planning the Past: Historical Landscape Resources and Recreation*, Shoe String Press, 1979.
- ⑨ 最近の国際歴史地理学会(International Conference of Historical Geographers)で設定されたセッションにも、その傾向が窺える。例えば、一九九八年(アイルランド)では「遺産、記憶、場所」(Heritage, Memory and Place)、二〇〇一年(カナダ)では「記憶の景観」(Landscape of Memory)や「自然遺産と文化遺産」(Natural and Cultural Heritage)、「集合的記憶の景観」(Landscape of Collective Memories)、二〇〇三年(マレーシア)では「遺産の争い」(Contested Heritage)や「愛国心と追悼」(Patriotism and Remembrance)などのセッションが組まれた。
- ⑩ B. Graham and C. Nash eds., *Modern Historical Geographies*, Pre-

nice Hall, 2000. [米家泰作・山村亜希・上杉和央訳『モダンティの歴史地理』古今書院 二〇〇五年（予定）]

⑩ N. Johnson, Historical geographies of the present. In B. Graham and C. Nash eds, *Modern Historical Geographies*, Prentice Hall, 2000.

pp. 251-272. [邦訳は前掲注⑥参照]

⑪ A. R. H. Baker, *Geography and History: Bridging the Divide*, Cambridge University Press, 2003, pp. 148-155.

二 景観に体现された過去

歴史地理学者が景観や場所およびその表象に付与された様々なアイデンティティや政治性を明確に捉えるようになったのは、一九八〇年代である。^⑪当初それは、研究対象と同時代の社会的・文化的・政治的文脈に即した議論が中心であったが、いったんそのような研究領域が認知されてしまえば、D・ローウェンタールやD・ハーヴェイの研究を承けて、研究対象時期からみた「過去」という文脈に議論が拡大するまでに、それほど時間はかからなかった。とくにその触媒となったのは、近代ヨーロッパにおいて夥しく創造された、「過去」を想起するための景観や場所である。

例えば、先に触れた教科書『モダンティの歴史地理』において、その潮流を捉えた終章「現在の歴史地理」を担当したN・ジョンソンは、^⑫二つの事例、第一次世界大戦の戦死者追悼のための墓地の景観と、アイルランドのヘリティジ・ツーリズムの観光地形成を特に選んで、現在における「過去」の解釈と景観との関係を概説している。前者の例は「過去」を記憶にとどめるために意図的に築造された景観であり、後者は「過去の空間」として積極的な維持と管理が図られた場所だといえる。このような具体的で物的な景観が体现する「過去」は、景観の形成や創造という歴史地理学に馴染み深い視角の延長にあるがゆえに、研究の的としても扱いやすい。そこで小稿においても、「過去」を想起するために意図的に築造された景観——メモリアル（追悼碑）やモニュメント（記念碑）と呼ばれるもの——を概観の出発点としよう。

1 悲劇と暴力の景観

「過去」を想起するために意図的に形成された景観のなかで、最も端的で重々しい例が、大量の死者をめぐるものである。そこでは、過去となった人々——死者たち——が、個々の死者がもつ家族や宗教という文脈からいったん切り離され、パブリックな歴史のなかで追悼あるいは顕彰されることになる。例えば、二〇〇一年に破壊されたニューヨークの世界貿易センタービルの跡地「グラウンド・ゼロ」において、どのような形態の景観が再構築されるべきか、アメリカ合衆国で様々な議論が巻き起こったことは、記憶に新しい。このことは、悲劇的な事件を社会が記憶していくために、その現場の景観のあり方に大きな関心が寄せられることを、鮮烈に示すものである。

このような悲劇的な出来事を忘れないために、大がかりな景観が組織的に作られた早い例の一つが、大量の戦死者をうみだした第一次世界大戦である。この大戦は、公的な戦没者墓地が数多く作られるようになった最初の戦争だといつてよく、戦没者墓地の築造をめぐる国家的な議論や、墓標を含めた墓地景観の様式に関心が寄せられている。とくにM・ヘフアナンは論文「イングランドよ永遠に」において、イギリス軍の戦没者墓地が作り出した景観とその分布に着目し、墓地が形成されるまでの政治的な経緯や論争を跡づけた。^③これに呼応する形でM・S・モリスが墓地庭園の形成とそのイギリスの様式を論じている。墓地はそもそも死者を追悼する場であり、それぞれの死者とその家族がもつ多様なアイデンティティを反映するものであるが、^⑤両者の研究は、戦没者墓地がそれらをむしろ否定し、戦争のナショナルな意義づけを象徴する場となることを示している。

悲劇的な死者の意義づけは、死者を悼む場の築造によって完成するわけではなく、むしろ後世の文脈によっても様々な解釈が付与されていく。第二次世界大戦中のユダヤ人のホロコーストを記憶に止めるために、ポーランドではアウシュヴィッツをはじめとする収容所が保存されているが、A・チャールズワースは追悼事業や博物館におけるその位置づけを検

討した。^⑥ 彼が見いだしたのは、共産主義の敵、ナチス・ドイツによる痛ましい「犠牲者」を追悼するか、あるいはカトリックの文脈で死者を哀悼し、カトリックの国ポーランドを強調する言説であり、これらが収容所を「脱ユダヤ化」とするという逆説的な様相である。またS・クックは、一九八三年にロンドンのハイドパークの片隅に築造された「ホロコースト追悼庭園」の設立にいたるまでの経緯をたどり、キリスト教とユダヤ教の緊張関係のなかで庭園の位置が決められたことを論じている。^⑦

こういった大量の死者を悼む場は、ナシヨナリズムや宗教を基盤とした「過去」の理解を体现する景観を作り出す。その多くは、往々にして特別な場所が選ばれるがために、直接関わりがない人々にとつては、日常生活からは離れた特異な場所となり、必ずしも強く意識されないことも生じる。このような悲劇の景観とその位置の関わりを包括的に類型化しているのが、K・E・フットの『記念碑の語るアメリカ』である。^⑧ フットはアメリカ合衆国における戦争や大量殺人、痛ましい事故死が、景観のなかでどのように表現されているか包括的に論じつつ、それらが「聖別（sanctification）」、「選別（designation）」、「復旧（ratification）」そして「抹消（obliteration）」に区分できることを提唱した。

フットのいう「聖別」とは、「英雄的行為や共同体のための自己犠牲」といった積極的な賞揚の意味を与えられた事件の現場に記念碑や慰霊碑を設置し、記念の行事を継続的に繰り返すことによつて「聖なる場」とすることである。また「選別」は、聖別ほど現場を神聖化するものではないが、現場を示す記念碑などが設置される場合である。「復旧」は、事件自体に名誉や不名誉の意義づけが為されず、事件の以前の状態にその場が回復することで、事件が忘れ去られるケースである。そして「抹消」は、積極的に忘れ去りたい事件の現場が、恥辱あるいは不名誉の場所と位置づけられる結果、以前の姿に回復されることもなく放置されることである。

このフットの区分は、「過去」を体现する景観に対して、見過ごされやすい側面を気づかせてくれる。研究者や一般市民が最も意識し、注目する「聖別」と「選別」では、具体的な景観形成や行事をめぐって、さまざまな帰属意識が表象さ

れるばかりでなく、現場の管理と維持が続くかぎり、それが議論的となり続ける。その結果、「過去」を体現する景観は、単に「過去」を表現するのみならず、見る者に常に「過去」を喚起し、過去認識を迫ってくる装置として、「過去」の理解をめぐる議論のまさに「現場」となり、そしてその過程は研究者の分析のための資料を残してくれる。

しかし、このような「見える」景観の影には、「復旧」あるいは「抹消」された景観がある。そのほとんどは研究者よっても、一般市民によっても見過ごされているのであるが、そこには「社会が記憶したくないと思っている価値観」が潜んでいるのである。フットはその例として、特に社会的な合意が形成されていない歴史的事件、例えばアメリカ合衆国の場合では、先住民と白人との戦いや、人種差別的な暴力事件、日系人の収容所を挙げているが、こういった「見えない」景観こそが、「見える」景観に体现された排他的な歴史意識とその特質を浮き彫りにしてくれるといえる。

2 モニュメントの景観

「過去」を想起するために意図的に形成された景観は、悲劇的なものばかりではない。むしろ肯定的で積極的な意味づけを与えられたモニュメントの方が、空間的に隔離されることもなく、記念碑や彫像、あるいは建築物の形をとって日常的な景観のなかに溶け込んでおり、慣れ親しむ機会が多いといえる。ヨーロッパや北アメリカにおいて、また日本においても、こういったモニュメントの築造の明確な動きは一九世紀に遡るもので、一九世紀から二〇世紀にかけて広範に展開し、選択された「過去」の出来事を公衆の眼前で表現する役割を果たしてきた。

歴史地理学者によるその検討は、N・ジョンソンが一九九五年に概観したように、ナショナリズムとの関わりに焦点が絞られてきた。^⑨その典型的な研究対象は、国の始源を象徴する場やあるいは指導者を賞揚する場であり、右に述べた戦争墓地も国の存亡に関わるがゆえに、その一つに位置づけられることになるう。

例えばR・ピートは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州の小さな町で一九二七年に設置された、独立戦争の発端の一

つ、「シェイズの反乱」の記念碑をめぐる、その設置の経緯をたどりつつ、権力と言説と景観の関係を論じた^⑩。またB・S・オズボーンは、カナダ建国の父、カルティエを讃えて一九一九年に築造されたモントリオールのモニュメントを取りあげ、カナダ・アイデンティティの確立とイギリスとの関係を議論している^⑪。さらにD・アトキンソンとD・コスグロウは、一九一一年に完成したローマのヴィットリオ・エマニュエーレ二世記念堂に着目し、一八六一年にイタリヤ統一を果たしたこの王を記念する建築物が、周囲の広場や建造物と一体の都市空間を構成し、またムッソリーニに利用されることによって、帝国の空間とアイデンティティを象徴する「記憶の劇場」となっていたと述べる^⑫。

こういった研究例は、近代のモニュメントとナショナルな歴史意識との強固な結びつきを示唆しているが、多くの場合、モニュメント設置の文脈とその後の利用を詳細に検討すればするほど、一筋縄ではいかない複雑な背景が見えてくる。ここで日本の研究例と対比してみれば、そのことが分かりやすくなるだろう。

モニュメントをめぐる日本の歴史地理学者のほとんど唯一の著作、千田 稔の『高千穂幻想』^⑬は、ホノニギノミコトが天から降り立ったとの伝説（いわゆる「天孫降臨」）をめぐる「幻想の風景」の検討である。このなかで千田は、伝説の場所を担おうとする複数の地域主義と、「八紘一宇」の石碑を建立する国家主義という、ナショナル・ヒストリーに対する複雑な関わり方が重層するなかで、伝説が揺れ動いていたことを示している。

こういった国家による史蹟の管理は、日本の場合、明治以降に進展したが、上からの強権的なナショナルリズムが初めて史蹟景観を形成することになったわけではなく、一八世紀から藩や村といった大小の地域を単位として、かつ様々な身分によって、記念碑を整備する動きが先行していたことは、日本史学の羽賀祥二が鮮やかに示した所である^⑭。そのような近世日本の記念碑や史蹟は、具体的な外国との接触と緊張関係を前提としたナショナルリズムの表れではなく、その種の前提が希薄な歴史意識と緩やかに結びついた地域的な実践として理解できよう。

このような日本のモニュメントのあり方とヨーロッパや北アメリカのそれとの違いは、ナショナルなるものとそれを支

える「公衆」のあり方の違い、さらには都市中心部の広場のような公的な空間の有無にも根ざしているように思われる。そのような視点からすれば、ナシヨナリズムや国民国家論を前提として分析される傾向が強い近代ヨーロッパや北アメリカのモニュメントは、優れてヨーロッパ的な文化景観として理解される必要がある同時に、そこでのナシヨナル・ヒストリーをめぐる深刻なせめぎ合いについても、深い検討と理解が要求される。そこでこの点に関して、さらに歴史地理学者の研究例を挙げておきたい。

例えばJ・J・ウインベリーによるアメリカの南北戦争における南部軍側のモニュメントの研究は、分裂したナシヨナル・ヒストリーに関わる早い研究の一つである。南北戦争が北軍の勝利によって一八六五年に終結した後、三五年後から五〇年後をピークとして、北軍の「侵略」に対抗する南部軍の兵士像のモニュメントが南部各地で数多く作られたが、これらは敗者として合衆国に統合された南部において、ナシヨナル・ヒストリーには統合しきれない別の「過去」が表現されていたことを示唆している。スコットランドにおいても、イングランドへの対抗を基軸とするゲール(ケルト)的な「過去」が、現在もおもなモニュメントのせめぎ合いを引き起こしていることを、C・W・J・ウィザーズが指摘している。^⑬

このようなモニュメントと「過去」をめぐる緊張や乖離は、植民地経験をもつ国において特に大きなものとなる。N・ジョンソンの論文「英雄の歴史を彫像化する」は、イギリスに植民地化されたアイルランドで、他の大英帝国領と同様、王室や貴族に関わる彫像が設置される一方、一八九八年にはイギリスに対する百年前の反乱を記念するための彫像が各地で築造され、独立の機運を高めるとともに、様々な政治勢力によって利用されたことを対比的に示している。そして一九二二年の独立後、王室に関わる彫像は破壊ないし撤去されたが、Y・ウィーランはこれをコロニアルな景観からポストコロニアルな景観への変化として位置づけ、象徴の場としての公的なモニュメントの役割と利用を鮮明に示した。^⑭

これに類似した端的なベルリンの例——現在、ドイツの戦没者追悼施設として知られるノイエ・ヴァッヘ——が、K・E・テイルによって報告されている。ノイエ・ヴァッヘは、もともととは字義通り、プロシア王宮の警備室であった建築物

であるが、これが政治体制の変化に応じて、第一次世界大戦の戦没者追悼の場となり、ナチスの英雄を讃える場となり、東ドイツにおいては反ファシズムを記念する場となり、そして東西ドイツ統合後には再度新たな意義が議論される様を、ティルは論じた。ここからは、記念碑的な建築物が、「過去」の認識の変化を単に反映するばかりでなく、その変化を表現する場として、いわば次々と乗っ取られていったことが分かる。こういった例が示すように、モニュメントは単に一度きり、ある立場の「過去」理解を表現しただけでは終わらない。そこに込められた意義づけが大きければ大きいほど、その限りの再利用や破壊さえも通じて、複雑な再調整に曝されることになる。

以上、「過去」を体現するために意図的に築造された景観をめぐって、歴史地理学の研究傾向を概観してきた。この主題に関心をもつ歴史地理学者の間では、追悼の場であれ、記念の場であれ、それが「過去」を選択的に表象する近代的な空間であるとともに、「過去」の解釈が争われ、調整される場であることが、ほぼ共通の理解となってきたことが窺える。しかし蓄積された研究事例は、研究者ごとに異なるフィールドのなかで個別に選択されたものであり、それぞれが固有の文脈を持っている。K・フットが試みたような、より広域的な視点にたった議論の体系化が求められるとともに、個々の墓地や記念碑のみを取りあげるのではなく、それらが都市景観あるいは村落景観のなかで構成要素としていかに溶け込み、モダニティの景観を演出していったのかという視点から、都市や村落の歴史地理のなかに位置づけなおす作業も、なお必要だと思われる。

またN・ジョンソンは、研究を拡大する二つのヒントを示唆している。その一つは、ジェンダーとの関わりである。ジョンソンは、彫像の形をとったヨーロッパのモニュメントが、男性像と女性像とでは役割が異なっていることに言及している^②。男性像は過去の出来事の当事者をそのまま表現する傾向が強いのに対し、女性像は例えば「自由」といった抽象的概念や、それぞれの国を象徴する女性像であることが多い。このことが、歴史の担い手を男性に限定しがちな男性的歴史観と深く関わっていることは、容易に推測できよう。

もう一点は、墓地や記念碑のように一カ所に固定された景観だけでなく、例えばパレードやデモのように限られた時間に現出した光景（スペクタクル）へと研究対象を拡大する試みである。^② 何らかの記念日に行われるパレードやデモは、過去との繋がりを意図した光景を繰りひろげる。その進路や構成者、記念碑や記念碑的の建築物との関わり、パレードの理解のされ方や制限のあり方は、格好の分析対象となるだろう。

3 ヘリティジの景観

「過去」の体現を意図して築造された景観と同じく、歴史的景観や遺産として積極的な維持と管理が図られた場所もまた、「過去」を体現している空間である。それは記念碑のように後から作られたものではなく、まさに「過去の景観」や「過去の空間」が、そのまま「保存」されたものとして提示され、そしてそのように錯覚されがちなために、見る者により強い説得力と影響力を及ぼす景観だともいえる。そこで、景観や場所が「過去」の遺産として管理される様相をめぐって、近年の歴史地理学の概観を続けていくこととしたい。

景観のなかに過去の痕跡を求める伝統的な歴史地理学者の手法は、「過去」を伝える景観には価値があることを訴えかける効果をもっていた。しかし歴史的景観の保存が一般的となり、「遺産（ヘリティジ）」という言葉、特に国連教育科学文化機関（UNESCO）による「世界遺産」の認定が観光地のステータスとなるにつれ、また歴史学者E・ホブズボウムの「伝統の創造」論が支持を得るにつれて、歴史的景観やヘリティジの場所が、単なる「保存」ではなく、新たな場所と景観の創造であることが、歴史地理学を含む様々な分野で広く理解されるようになってきた。とりわけ「過去」の表象と利用の全般に関心を拡大していったD・ローウェンタールは、『ヘリティジ十字軍と歴史の掠奪』において、世界を席卷した「ヘリティジ崇拜」において、いかに「過去」が意図的かつ恣意的に利用されているかを、皮肉たつぷりに論じている。^③

B・グレアムほか編『ヘリティジの地理学』は、グローバル化した現代のヘリティジを人文地理学の立場から包括的に

論じたものであるが、ヘリテイジの起源を一九世紀のナショナルリズムと国民国家との関わりに求めている。それは、ナショナル・アイデンティティを「発見」ないし創出するための道具としてヘリテイジを位置づけるものであり、ナショナルな歴史を物語る景観や場所に対して何らかの帰属意識を抱くことがアイデンティティの基礎となる、という視点を取る。それゆえ、ヘリテイジの場所は、単に文化遺産や経済的資源となるばかりでなく、そこでは過去認識とアイデンティティをめぐるポリティクスが生じ、知識と表象の体系が蓄積されることになる。つまり、景観保存の過程を跡づけるだけでなく、それがどのような文脈と価値づけによって仕立てられていったかという点に、歴史地理学によるヘリテイジ研究の意義があるといえる。

例えばイギリス（イングランド）の場合であれば、ナショナル・アイデンティティ、すなわち「イングリッシュネス」の思想と景観の結びつきがいかにかに形成されたかが焦点となる。イギリスの農村風景を象徴するというコッツウォルズ地方を扱ったC・ブレイスの論文「後ろを振り返って」は、一九世紀末期から二〇世紀前半にかけての様々な記述を分析し、過去や伝統、歴史や持続といった発想が、この地方をいかにイギリスの象徴として位置づけていったかを論じている。^{②⑤} 都市の景観もまた、歴史的建造物で満たされている場合には特に、アイデンティティに関わるヘリテイジの景観となる。一九八〇年代のロンドン都心部の再開発計画をめぐる論争を取りあげ、ヘリテイジと資本とアイデンティティの関係を論じたJ・M・ジェイコブズの研究は、その一例である。^{②⑥}

D・マットレスの『風景とイングリッシュネス』はこのような論点を幅広く論じた到達点を示している。そこでは、農村に郷愁を見だし、その保全を求める発想が近代の所産であること、ナショナル・アイデンティティが国内にイギリスらしい場所とそうでない場所という差異の言説を産み出すこと、また過去認識の他にも多様な思想と風景が結びつけられ、「イギリス的な景観」が生産あるいは復原されていったことが論じられている。^{②⑦}

このようにヘリテイジの景観とナショナルリズムをかなり直接的に結びける分析は、イギリス（イングランド）の場合、

特に有効であるようにみえるが、他の国々においては、当然ながらナショナリズムおよび農村景観の変化のあり方の違いが大きく、単純にそこに収斂するわけではない。例えばR・E・デーテルが示しているのは、アメリカ合衆国サウスカロライナにおける二〇世紀前半の歴史的建築の保存が、いかに南部という地域主義と結びついていたかということである。²⁸⁾

またN・ジョンソンは、アイルランドにおける植民地時代のイギリス地主の館が保存され、ヘリティジ・ツーリズムの場となっていくにあたり、地域史のなかで当該の館が果たした役割が物語られることに注目している。²⁹⁾ ここで日本の例を引き合いにだせば、福田珠己が論じているように、沖縄県竹富島の赤瓦の景観もまた、日本のナショナリズムというよりは、地元の様々な思惑のなかで新しく創造された「伝統」的景観であった。³⁰⁾

先に触れたB・グレアムらの『ヘリティジの地理学』³¹⁾が、後半のほとんどをヘリティジの「スケール」の問題に割いているように、ナショナルなヘリティジに対して、地域的あるいはローカルなヘリティジや、より大きく国際的あるいはグローバルなヘリティジがある。このようなヘリティジを位置づける多様な「スケール」は、過去認識を規定する空間的な「スケール」の多様性の裏返しであって、ナショナルな「スケール」はそのなかの代表的な一つであるに過ぎない。さらに、帰属意識を込められた景観は、植民地主義とともに空間的な移動をも果たす。例えば一九三〇年代のインドのビハールで、イギリス移民が郷愁を表現し、アイデンティティと集合的記憶を維持するために、イギリス的な景観形成を行っていたことを、A・プラントが論じている。³²⁾「過去」を体現する景観は、様々な流動する空間的スケールを持っているのである。

従って、一つのヘリティジが喚起する「過去」には、同時に複数の空間的スケールが重層することも起こる。J・E・タンブリッジが述べるように、ヨーロッパ各地のヘリティジの景観は、様々なスケールの過去認識が摩擦と軋轢を引き起こす場であるとさえいえる。³³⁾例えばポーランドに残るドイツ的な景観は、ドイツ領時代の支配と被支配の記憶を喚起してしまう「場所を間違えたヘリティジ」であり、文化的摩擦を引き起こしかねない、とタンブリッジは指摘する。

そのような問題含みのヘリテイジは、民族の移動や少数民族の混在、あるいは植民地主義を経験した所ほど多く存在し、今なおどのように折り合いをつけるべきかという課題をもたらす。それは日本とも無関係ではない。旧大日本帝国の植民地の各地に築造された神社は、帝国の崩壊後、ほとんど撤去されたが、ソウルの旧朝鮮総督府庁舎のように最近になって議論が巻き起こり、撤去された例もあれば、中国では大連の日本統治時代の建築物のように、むしろ日本人を呼び寄せる観光資源となる例もある。これらは、ヘリテイジの景観をめぐるポストコロニアルな議論の必要性を示している。

以上に概観してきたように、ヘリテイジの景観は過去認識とアイデンティティを体现する場であると同時に、その軋轢の場となるのであって、当該の景観を触媒として様々な論争や言説、思想が展開することになる。その現代的な様相は、『ヘリテイジの地理学』に代表されるように、歴史地理学的な指向性をもつ文化地理学者を中心に研究が進んでいるが、ヘリテイジの景観それ自体の形成過程を復原する同時に、近代的な現象としてヘリテイジの思想を位置づける作業は、おそらく歴史地理学者にとって接近しやすい筈である。日本においてもヘリテイジの歴史地理学が切り開かれることを期待したい。

- ① 例えば、D. Cosgrove and S. Daniels eds., *The Iconography of Landscape: Essays on the Symbolic Representation, Design and Use of Past Environments*, Cambridge University Press, 1988. [土田 鎔・内田 忠雄監訳『風景の図像学』、地人書房、二〇〇一年] および、森川 絵図研究会編『絵図のコスモロジー』、地人書房、一九八八・八九年。
- ② N. Johnson, *Historical geographies of the present*. 一巻注②参照。
- ③ M. Hefernan, *For ever England: the Western Front and the politics of remembrance in Britain*, *Examene*, 2, 1995, pp. 293-323.
- ④ M. S. Morris, *Gardens 'Forever England': landscape, identity and the First World War British cemeteries on the Western Front*, *Examene*, 4, 1997, pp. 410-434.
- ⑤ 例えば、中川 正『ルイジアナの墓地——死の景観地理学——』、古今書院、一九九七年。
- ⑥ A. Charlesworth, *Contesting places of memory: the case of Auschwitz*, *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 1994, pp. 579-593.
- ⑦ S. Cooke, *Negotiating memory and identity: the Hyde Park Holocaust Memorial*, *London, Journal of Historical Geography*, 26, 2000, pp. 449-465.
- ⑧ K. E. Foote, *Shadowed Ground: America's Landscapes of Violence and Tragedy*, University of Texas Press, 1997. [和田光弘ほか訳『記念碑の語るアメリカ——暴力と追悼の風景——』、名古屋大学出版会、

- ⑥ N. Johnson, Cast in stone: monuments, geography, and nationalism, *Environment and Planning D. Society and Space*, 13, 1995, pp. 51-65.
- ⑦ R. Peet, A sign taken for history: Daniel Shays' memorial in Petersham, Massachusetts, *Annals of the Association of American Geographers*, 86, 1996, pp. 21-43.
- ⑧ B. S. Osborne, Constructing landscapes of power: the George Etienne Cartier monument, Montreal, *Journal of Historical Geography*, 24, 1998, pp. 431-458.
- ⑨ D. Atkinson and D. E. Cosgrove, Urban rhetoric and embodied identities: city, nation, and empire at the Vittorio Emanuele II monument in Rome, 1870-1945, *Annals of the Association of American Geographers*, 88, 1998, pp. 28-49.
- ⑩ 千田 稔『高千穂幻想——国家を背負った風景——』, PHP研究所一九九九年。
- ⑪ 高木博志『近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財——』, 校倉書店, 一九九七年, 二四六～二四四頁。
- ⑫ 忍賀祥二『史蹟論——一九世紀日本の地域社会と歴史意識——』, 名古屋大学出版会, 一九九八年。
- ⑬ J. J. Winberry, 'Lest we forget': the Confederate monument and the Southern townscape, *Southeastern Geographer*, 23, 1983, pp. 107-121.
- ⑭ C. W. J. Withers, Place, memory, monument: memorializing the past in contemporary Highland Scotland, *Environment*, 3, 1996, pp. 325-344.
- ⑮ N. Johnson, Sculpting heroic histories: celebrating the centenary of the 1798 rebellion in Ireland, *Transactions of the Institute of British Geographers*, 19, 1994, pp. 78-93.
- ⑯ Y. Whelan, The construction and destruction of a colonial landscape: monuments to British monarchs in Dublin before and after independence, *Journal of Historical Geography*, 28, 2002, pp. 508-533.
- ⑰ K. Till, Staging the past: landscape designs, cultural identity and Erinnerungskultur at Berlin's Neue Wache, *Environment*, 6, 1999, pp. 251-283.
- ⑱ N. Johnson, Cast in stone: monuments, geography, and nationalism. 補註⑤参照。
- ⑲ N. Johnson, The spectacle of memory: Ireland's remembrance of the Great War, 1919, *Journal of Historical Geography*, 25, 1999, pp. 36-56.
- ⑳ E・ホブスボウム, ト・レンジャー編(前川啓治・梶原景昭ほか訳)『創られた伝統』, 紀伊国屋書店, 一九九一年。
- ㉑ D. Lowenthal, *The Heritage Crusade and the Spoils of History*, Cambridge University Press, 1996.
- ㉒ B. Graham, G. J. Ashworth and J. E. Tunbridge eds., *A Geography of Heritage: Power, Culture and Economy*, Arnold, 2000.
- ㉓ C. Brace, Looking back: the Cotswolds and English national identity, c.1890-1950, *Journal of Historical Geography*, 25, 1999, pp. 502-516.
- ㉔ J. M. Jacobs, Negotiation the heart: heritage, development and identity in postimperial London, *Environment and Planning D. Society and Space*, 12, 2003, pp. 751-772.
- ㉕ D. Matless, *Landscape and Englishness*, Reaktion Books, 1998.
- ㉖ R. E. Dattel, Southern regionalism and historic preservation in

Charleston, South Carolina, 1920-1940, *Journal of Historical Geography*, 16, 1990, pp. 197-215.

⑩ N. Johnson, Where geography meets history: heritage tourism and the big house in Ireland, *Annals of the Association of American Geographers*, 86, 1996, pp. 551-566.

⑪ 福田珠己「赤瓦は何を語るか——沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動——」、地理学評論、六九A巻九号、一九九六年、七二七—七四三頁。

⑫ B. Graham et al. eds., *A Geography of Heritage*. 前掲注⑤参照。

⑬ A. Blunt, Collective memory and productive nostalgia: Anglo-Indian homemaking at McCluskieganj, *Environment and Planning D: Society and Space*, 21, 2003, pp. 717-738.

⑭ J. E. Tunbridge, The question of heritage in European cultural conflict. In B. Graham ed., *Modern Europe: Place Culture and Identity*, Arnold, 1998, pp. 236-260.

三 歴史／地理的表象の諸相

1 場所の物語

パキスタンのラホールには、ムガル帝国時代に地下トンネルが作られたという伝説が伝わるという。J・L・ウェスコートはこの伝説に着目して、目に見えない想像上の景観とその集合的記憶を論じている。①ここで扱われている地下トンネルは実在が確認されているわけではなく、あくまで伝説として物語られているものでありながら、現在に至るまで一七世紀のラホールのイメージを規定してきたという。この事例は、目に見える具体的な景観や場所だけが「過去」を想起する場なのではなく、実際に眼で見ることができない景観や場所であっても、言説上においてそれが構築されうることを示唆している。

前章で概観してきた墓地や記念碑、ヘリテイジの景観は、いずれも比較的小さな空間であったが、一人の人間が同時に全貌を見渡すことが出来ないほど巨大な場所、例えば地域や国と呼ばれるような大きな空間もまた、このような「想像上の景観」に似たところがある。そのような大きな空間自体が、個々の人間にとっては全てを自ら体験しきれるものでなく、

認識上、あるいは地図や言説という表象の上に措定された構築物でしかありえない^②。と同時に、そこにはそういった空間をめぐる「過去」の理解が付随し、構築された空間とその「過去」の両者が、互いに支える関係を作り出すからである。

B・グレアムは、アイルランドおよびヨーロッパにおけるナショナル・アイデンティティの文化地理と歴史地理を研究するなかで、右の問題に突き当たった一人である^③。彼の見方によれば、近代の国民国家とは、特定の領土への帰属意識とその理想化された歴史を、つまりは空間と時間とを共有する存在であって、「必然的に場所の物語は力を持ち、過去をめぐる霸権的な表象のなかに固定され、そして領域国家を支持する正当性と権威という近代的な考え方において、今なお根本的なものであり続けている^④」という。

グレアムによれば、例えばアイルランドでは、ケルト的な景観美に満ちた国土というイメージと、それに対するイギリスの植民地化への抵抗という物語が共有され、北アイルランド紛争を後押しした強固なナショナル・アイデンティティが備わっている。またスペインには、イスラム教徒によつて奪われた空間の「レコンキスタ（再征服）」と、フェルナンド王とイザベラ女王の結婚による統一的な政治体制の誕生という物語がある。これらは単なる歴史の物語ではなく、特定の空間にまつわる「場所の物語」であって、歴史と地理が不可分となった言説を構成しているのである。

地図作成や地理的調査が国土を可視化し、ナショナル・アイデンティティの形成に寄与するという主張が、B・アンダーソンの「想像の共同体」論を地理的に拡張したものであれば、こういった「場所の物語」に注目するグレアムの見方は、それを歴史的かつ地理的に拡張したものだといってもよく、過去のそれぞれ時点における歴史／地理的な「物語」、あるいは歴史地理的な表象や知識、そしてその蓄積とせめぎ合いといった事柄が、「過去認識の歴史地理学」の課題として大きく立ち現れることになる。

例えば近代日本の場合、国の始まりをめぐる神話がそのような「物語」を代表していた。千田稔の『邪馬台国と近代日本』は、明治から大正期の邪馬台国論争が、天皇像の理解と朝鮮半島の位置づけに関わり、日本の国家草創や韓国併合

をめぐる政治的な含意を帯びていたことを、丁寧に読み解いている。^⑥ここで千田が浮き彫りにした「近代日本の『古代』へのまなざし」は、専ら研究者の世界に限定されるものではあったが、古代国家の位置比定という歴史地理学的な作業がある種のナシヨナリズムと複雑な関係を取り結んでしまうことを示すよい例である。

「場所の物語」は、ナシヨナルなものに限らず、様々な空間的スケールにおいて、現在もなお、様々な形で語られている。政治家の言説として飛び出すこともあれば、故国を離れた人々の間で日々語られているものもある。^⑦博物館もまた、地域の「過去」を効果的に展示する場である。^⑧さらに前章でみたように、記念やヘリテイジの景観は、そのような「物語」の触媒となってきた。しかしこのような物語を過去に遡って検討する際、過去の人々の肉声を直接聞くことはできず、何らかの文字資料か古地図のみが、ほとんど唯一の手がかりとなる。そして、その作業に適した史料の多くは、偶然書かれたものというよりは、その当時における「場所の物語」を語るいわば歴史／地理的な表象の装置であったために、残されていることが多いといえる。そこで次節では、そのような装置の諸相をめぐる研究例を見ていきたい。

2 歴史／地理的表象の実践

以下では、「場所の物語」を表現する様々な表象、例えば地誌や伝説といった言説から地図に至るまでを、歴史と地理が一体になった表象という意味で「歴史／地理的表象」と呼び、その歴史地理学的研究の可能性を探っていききたい。その最初の手がかりとして、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけての、アメリカ合衆国ニューヨーク州地方のある田舎町の郷土史編纂の営みを取りあげた二〇〇二年のK・クアーツの論文「町の回想 (remember)／構成員の再設定 (re-member)」に注目してみよう。^⑩

クアーツは、前章で概観した記念碑やヘリテイジの景観をめぐる地理学の諸研究の多くが、「過去」に関して「道具主義的なフレームワーク」に陥っていること、すなわち様々なアイデンティティの存在を所与の不動の前提とみて、「過去」

はアイデンティティ表現の「道具」として利用されるに過ぎないと見なす傾向が強かったと批判する。クアーツの事例によれば、「郷土史」の編纂それ自体が、町のアイデンティティを再生産すると同時に、共同体の範囲を探っていく営みであり、個人や集団はそうにして蓄積されていく「歴史」のなかに自らの位置を探ることになる。「過去」とアイデンティティは、どちらか一方が他方に先行する前提となるわけではなく、「歴史」はアイデンティティの営みを構造化すると同時に、アイデンティティの営みによって構造化されることになる。

このクアーツの議論は、郷土史を含め、「場所の物語」に関わる様々な歴史／地理的表象が、それぞれの時点におけるアイデンティティを探る営みと相互規定的であることを示唆している。その複雑な絡み合いを検討するためには、「場所の物語」の内容を検討するだけではなく、その表象がどのような実践のなかで作られているのか、そして作り手と対象となる場所との関係や、描かれた物語のなかでの作り手やそれ以外の人々の位置づけはいかなるものか、といった諸点に関して丁寧な分析が必要となることを意味している。

その意味で、D・C・ハーヴェイとR・ジョーンズの一連の研究がもつ着目点は興味深い^⑩。彼らが論じているのは、中世イギリスのコンウォール半島教会の権威と宗教的アイデンティティ、および地域のまとまりが、聖人伝や特許状という遺産が示す「過去」が、書写や流布、および儀式において再生産される事態である。その際、ハーヴェイとジョーンズは社会学者P・ブルデューのハビトゥス論を援用し、習慣的に繰り返される書写や儀式といった実践によって、教会の宗教的および世俗的な権威を印象づける「過去」が、いわばサブリミナルな形で地域に浸透していったとする。この視点は、「場所の物語」を語る歴史／地理的表象の装置とその恒常的な実践の有り様を捉えたものだといえる。

このような歴史／地理的表象の営み、あるいは実践を丁寧に捉えた歴史地理学研究は、日本の文化地理学者や歴史地理学者によっても、少しずつ試みられるようになってきている。そこで以下では、右の論考が示唆する注意点に留意しつつ、時代を少しずつ遡ってその動向を概観していきたい。

博物館、特に地域の「過去」を展示する郷土博物館の収蔵品や展示のあり方自体の歴史をみることは、その当時の「過去」に対する取り組み方と、その担い手のアイデンティティとの連関を見ることになる。福田珠己はアメリカ合衆国ニューヨーク州シラキュースの歴史協会の活動を、一九一一年の所蔵物カタログを手がかりに考察している^⑫。そこで見されたのは、町の産業の中心にあった白人男性の名士たちを中心とする「私たち」が、「私たち」の歴史をたどる一方、先住民たちは歴史のなかではなく、自然科学の空間のなかで、動植物資料とともに「科学的」に位置づけられている様である。福田は、このような初期の博物館の営みのなかに「私たち」の生成を見いだし、「私たち」の地域の歴史を共有することによって、『私たち』と『私たちでない者』が明確に形成されていくとする。

学校教育のなかにも、歴史／地理的な表象の実践が取り込まれていた。特に近代日本の郷土教育は、地理教育と歴史教育を総合する内容を持ち、愛国心へと連なる愛郷心の育成を目標に置いていた点で重要な研究対象となる。笹山めぐみと加藤政洋は、郷土の地理と歴史を歌詞とした「地理歴史唱歌」に着目し、また関戸明子は、より実践的でフィードバック的な「郷土の観察」や「郷土研究」に注目する一方、植民地では郷土教育から歴史が除外され、民族的アイデンティティの強化を回避しようとする傾向があったことに触れている^⑬。郷土教育は個々の生徒がローカルなアイデンティティと、その延長に位置づけられたナショナル・アイデンティティを自ら喚起する場であり、「内地」と「外地」とでは異なる意義と効果を帯びていた。

こういった近代日本の郷土教育では地理と歴史がしばしば一体のものとされたが、その前提には、地理と歴史の区分が曖昧であった近世地誌的な眼差しがあったようにも思われる。その最後の集大成といってよい吉田東伍の『大日本地名辞書』は、「地誌」として構成されつつも、主要地名ごとの現在の地理を詳述するのではなく、もっぱら古代から明治に至る歴史的な沿革を略述する内容をもつ。千田稔は、『大日本地名辞書』にとつての「地」とは「歴史空間」のことであって、「地誌」の叙述は、歴史もその空間に存在するものとして取り込むことに他ならない。『空間の物語』というにふさわし

い」と指摘する^⑮。この評価は、地理を語ることが歴史を語ることの意味していた近世地誌的な眼差しを、よく捉えているといえる。

このような過去遡及的な眼差しをもつ地誌のあり方は、近世の官撰地誌においても民間の名所図会においても共通する性格であって、その中心には名所や旧跡、歴史的な墳墓や寺社といった「過去」を想起させる景観があった。上杉和央は近世の名所を「過去名所」と「現在名所」に区分し、京都や近世前期の大坂の名所の中心は「過去名所」であったと指摘している。こういった「過去名所」の記述で満たされた地誌や名所図会は、近世を代表する歴史／地理的表象であった。

土居浩は、「内なる歴史」地理学^⑯として場所と物語の關係に着目し、場所にまつわる様々な物語や伝承の蓄積を「トポグラフィティ」と呼ぶことを提唱している^⑰。このような「トポグラフィティ」が構成しない蓄積されるにいたり、近世から近代にかけて地誌的な眼差しが果たした役割は無視できない。「過去」の物語に充ち満ちた空間として地域を描くその姿勢は、どのようなアイデンティティと結びついていたのであろうか。

近世史の杉本史子は、地誌を含む「近世の記録」について、①「ある地域を外から総括することによって、領域掌握のヘゲモニーを握ろうとするもの」、②「地域の外から地域を訪れ、地域をその個性ゆえに描写しようとするもの」、③「自己のアイデンティティのよりどころとして地域を記述しようとする」もの、この三つの類型に区分している^⑱。官撰地誌は①のタイプを代表するものであるが、そこでは大まかにいえば、領主にとつての祖先の顕彰や、支配対象たる「土人」の伝承を考証主義的に糺すこと、あるいは古典的世界への回帰といったことが意識され、領土における歴史／地理的表象の主導的な編成が意図されていたと思われる^⑲。②に関しては次節で取りあげることにするが、③については、近世史の岩橋清美の旧記論が、重要な論点を提出している。

岩橋清美のいう「旧記」とは、十八世紀以降、村落において村の由緒や伝承を記録したものであり、百姓による「地域史」あるいは小さな「地誌」作りの営みといってもよい。岩橋によれば、「官撰の地誌に見られる歴史観と地域の歴史意

識の間には微妙な差異が存在しており、地域の歴史意識は幕府の歴史観に包摂されるものではなかった。そして、その差異にこそ地域の独自性があつたのである」という。こういった「旧記」を編纂する営みが、作り手のローカルなアイデンティティを触発するであろうことは、想像に難くない。

このような「旧記」作成の営みは、様々な機会や理由から為されたが、従来、一次史料としての価値が低いとみなされ、あるいはごく個人的な活動とみなされて、軽視されることが多かった。筆者はかつて、このような「旧記」を用いて、近世の山村民による中世像の構築を論じたことがあるが、そのうちの一つの事例は、全く個人的な動機で村の開発伝承を証明するために為され、社会的な影響力を持ち得なかったが、もう一つは領主に対する貢租免除の運動と連動して、次第に郡という広い地域全体で「過去」が共有されたケースであり、結果的にそれが地域のアイデンティティと化す過程が窺えた。^④

一方、名所図会の刊行や国学の展開のなかで、森 幸安や北浦定政のように古代都城の景観復原に情熱を燃やした人物が現れ、また上杉和央や堀 健彦が論じたように、偽古図という形態をとりながらも古環境の復原への関心が生じたことは、近世の歴史／地理的表象における大きな特色だといえる。これらは、「過去の景観」が現在では失われていることを前提として、文献上知りうる「過去」あるいは想像上の過去の位置を、現在の景観において特定しようとする衝動の表れであるといえる。

この種のいわば「位置比定の衝動」ともいうべき動きは、「過去」を体现する景観があるから「過去」を物語るのではなく、それを逆転させるものであって、「過去」の物語を体现する景観を希求するあまりに、それを同時代の景観のなかに探し求める動きであつたといえる。加えて、測量と地名収集に基づく北浦定政の平城京復原は、方法論としては現在の歴史地理学にも通底するものであり、実証的な歴史地理学の実践のルーツの一つとしても位置づけられよう。

さて、右のような歴史／地理的表象の実践、あるいは個々の場所に即した過去遡及的な眼差しは、中世とそれ以前に関

しては研究例が少ないようである。歴史地理学では山村垂希が、南北朝期の長門国府を舞台として、古代の国府をイメージした空間認識に基づいて在地領主権力が地図を作成し、それが所領安堵の獲得に寄与したことを推測している。^{②④} また中世史の蘭部寿樹は、『今昔物語集』にみえる村落草創の伝承に着目し、村落形成の宗教的な物語を分析した。^{②⑤} 少数ながらこれらの研究例は、中世以前の日本における歴史／地理的表象の実践に関わる研究の可能性を示唆しており、他にも検討対象が拡大していくことを期待したい。

3 他所の表象と「過去」への旅

前節で概観した歴史／地理的表象の実践は、自らの国なり地域なりにおいて、すなわち「私たちの場所」において、すでに過去のものとなった出来事に対する遡及的な眼差しの表れであり、その視線の先には多かれ少なかれ、自らの空間的なアイデンティティへの関心があつた。このような「自己」のアイデンティティは、周辺のな「他者」との対照のなかでより強化されるが、そこでは空間的な差異を歴史の差異に読み替えるような物言いが生じることがある。本節ではこのような現象についても、「過去認識の歴史地理学」の一つとして位置づけておきたい。

右の視点は実のところ、E・W・サイードの『オリエンタリズム』がすでに言い当てている点であり、自己と他者の心象地理は「我々の土地——野蛮人の土地」の構図をもつ。^{②⑥} 「野蛮人」とは、時間が止まったままで、歴史を持たず、文明化されていない、遅れた人々なのであつて、同時代の空間のなかに歴史の進行の差異を指定するこの種の自己中心的な心象地理は、実に長い歴史を持つている。しかしとりわけヨーロッパの近代は、他所（Other places）を前近代、自らの場所（Our place）を近代と指定する構図を、他所を体験するなかで見いだしていた。

一九九五年のD・グレゴリーの論文「本とランプの間で」は、ヨーロッパからエジプトを訪れた一九世紀の二人の旅人——ナイチンゲールとフローベール——の手記をもとに、この構図を取りだしたものである。^{②⑦} グレゴリーは、エジプトの

旅行記における景観や空間、人々の表象に着目し、旅人の興味が古代遺跡や昔話の世界、「東洋的」な性的倫理にあつて、これらが西洋Ⅱ現在、東洋Ⅱ過去という構図の心象地理を作り出していたことを論じている。同じ年にナポレオンによる『エジプト誌』を論じたA・ゴドレフスカも、ヨーロッパ人によるエジプトの「知的征服」が、古代エジプトへの誘いという装いを持ち、エジプトの「過去」を発見していくヨーロッパ人の姿を強調していたことを指摘した。^⑧

このような近代ヨーロッパ的な心象地理は、旅人だけが経験したものでなく、様々な表象や実践を通じて、ヨーロッパ本国にも吸収されていく。T・パシャウスカは一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのイギリスの地理教育において、オーストラリアが原始の大陸として教えられ、先住民がオーストラリア固有の動物の一つであるかのようなイメージが植え付けられていたことを示している。^⑨このようなイメージは現代の観光ガイドブックにも残っている。パシャウスカは例えば、「地球の片隅に据え付けられた巨大な島大陸は、文字通り隔離された世界である。多くの意味で、オーストラリアを訪れることは、不思議の国に時間旅行を行うようなものだ」といった記述例を紹介しているが、あたかも時間の流れが止まった古代空間への「タイムトラベル」として、オーストラリアは今なお消費され続けているといえる。

このように、他所への旅が、同時に「過去」への旅であるような物言い、あるいは空間的な差異を歴史の速度の差異に読み替えていく言説は、同時代の空間のなかに「過去」を発見すると同時に、そこでの時の経過を否定することである。それは右の例のように、ヨーロッパとそれ以外という大きなスケールを持つこともあれば、ヨーロッパ内部においてより小さなスケールで見いだされることもあった。P・グリフィズらは、二〇世紀前半のイギリスにおけるウェールズへの旅行記を取りあげ、ことさらに古代遺跡や伝承をめぐる旅を通じて、ウェールズの景観や人々までもが古代めいて描かれていったことに着目している。^⑩このような風潮は、「伝統」（ウェールズ）を体験する「近代」（訪問者）という差異の構図と、その体験を目的とする旅行者をさらに産み出すことになる。

また、このような「過去」への旅において、他所における遺跡や「伝統」的な建築物は、その地の過去の歴史を体現す

るといふよりは、その地が今なお「過去」のままであることを象徴する役割を付与されることになる。二〇世紀前半のスコットランドでは、ナショナルトラストや帝国博覧会によって民家が「遺産」として保存されるようになったが、H・ロリマーの論文「スコットランド高地への眼差し」によれば、これは「近代の周縁にある場所」の「伝統」と「真正性」を、歴史から取り残された他者として位置づける動きであった。^⑪

このことは、近代的なアイデンティティの形成にとって、歴史の遅れた他所を周縁に必要とすること、そこに時間と空間の二重の差異を設定することで、近代的なる自己が体験されることを示唆している。と同時に、そのような他所のヘリテイジの景観に対して訪問者が読みとる「場所の物語」は、自己のアイデンティティに直接結びつくヘリテイジに対するそれとは、大きく質的に異なっていたといえる。

以上に見てきたような他所の「過去」をめぐる景観や表象は、日本においても見いだされるものである。近世日本の場合、前節でみた杉本史子のいう第②の「地域の記録」、すなわち「地域の外から地域を訪れ、地域をその個性ゆえに描写しようとするもの」に、その萌芽を見て取ることができる。

とくに山の奥深くの村々への旅は、近世の経済発展から取り残された「僻地」への旅であり、その風俗の奇妙さが紀行文の焦点の一つとなったことを、幾人かの国文学者が指摘している。^⑫ また民俗学の榎村賢二は、特に「愚か村」としてそのような土地を訪問する紀行文に着目した。^⑬ こういった紀行文は一八世紀の半ばから出現するが、単に文化的な劣位を強調するばかりではなく、「桃源郷」の構図が積極的に重なられ、古代や神代の人々として肯定的に描かれた面もあったことに注意が必要である。それはまさに、歴史から取り残された他者を「内なる異文化」として周辺化すると同時に、訪問者が属する都市社会の経済的・文化的発展を対比的に自覚させるものであった。ただし、都市の住人が「桃源郷」を一方的に「過去の空間」として表象する非対称的な関係ばかりが成立していたわけではない。筆者が扱った事例によれば、訪問者を迎える側が積極的に地元の「場所の物語」を演出することもあった。^⑭

とはいえ民俗学の岩田重則は、地方の文化を選れたものとみなし、それに対する知的好奇心や記録が生じた近世後期が、日本民俗学ないし民俗学的な営みの始まりであることを示唆している^⑤。このような営みはしかし、明治以降、ナショナルリズムが強く自覚されることによって変質し、山村に代表される周辺化された空間は、単なる他者ではなく、日本というナショナルな「場所の物語」のなかに捉えられていくことになる。

初期の柳田国男の動向は、このことをよく象徴しているよう。「思うに古今は直立する一の棒ではなくて、山地に向けてこれを横に寝かしたようなのがわが国のさまである」として、歴史から取り残された「先住民族」の住む空間を山地に想定した柳田は、次第にこの構図をあきらめながらも、近代化から取り残された地方、たとえば琉球列島に、ナショナル・ヒストリーの始まりの場所を求めていくからである。このように近代日本の国内で周辺化された地域は、近代化から取り残された他者的なものとして差異化されると同時に、「過去の日本」を保存する空間という捻れた位置づけを与えられていくことになる。大城直樹は、八重山諸島の御嶽をめぐって、ローカルな民俗が「近代国民国家的な『まなざし』のもとで対象化されてしか見いだされ得なかった」と述べるとともに、そのような民俗を熱心に記述すると同時に抑圧する立場にあった地元の知識人の矛盾を論じている^⑥。

その一方、他者として差異化された地方の人々にとって、与えられたイメージは、自らのアイデンティティを立ち上げる梃子ともなった。小島邦江が示すように、二〇世紀前半の柳宗悦らの民芸運動は、地方にある日常的なものの再発見を地理的な表象のなかに位置づける運動でもあったが、濱田琢司の一連の研究が論じたように、民芸運動は陶磁器の産地に「伝統」を自覚させ、地方のアイデンティティとして取り込まれていくことになる^⑦。

こういった諸研究が示唆しているように、他所への旅やその背景にある眼差しは、必ずしも一方的に、歴史に取り残された「過去の空間」という表象を押しつけるばかりであったのではない。他者として位置づけられた地域や人々との交流や接触のなかで、互いに影響を与えあい、そのなかで互いのアイデンティティが見いだされていくことも、当然生じてい

た筈である。そのような接触の場を見落とすならば、他所の表象——旅行記や民俗学的な営み——を素材とした検討は、たとえ批判的な意図から取りあげたとしても、当該の「他所」が一方的に対象化され、表象されるばかりの地域であったかのような理解をもたらす危険をかかえているのである。

往々にして、旅人や訪問者と地元との交流や接触の場にアプローチするにあたっては、訪問する側の史料ばかりが残され、一方に偏らない検討は難しい。しかし、そのような限界を巧みに乗り越えて、互いに異なった空間のアイデンティティと「場所の物語」の接触と交流、そしてせめぎ合いにまで、視野を深化させた歴史地理学的研究が發展することを期待したい。

- ① J. L. Wescoat Jr., M. Brand and M. Neem, Gardens, roads and legendary tunnels: the underground memory of Mughal Lahore, *Journal of Historical Geography*, 17, 1991, pp. 1-17.
- ② 若林幹生『地図の想像力』講談社、一九九五年。
- ③ B. Graham, No place of mind: contested Protestant representations of Ulster, *Exoneme*, 1, 1994, pp. 257-282. B. Graham ed., *In Search of Ireland: A Cultural Geography*, Routledge, 1997. B. Graham, The past in Europe's present: diversity, identity and the construction of place, In B. Graham ed., *Modern Europe: Place, Culture, Identity*, Arnold, 1998, pp. 19-49. B. Graham, The past in place: historical geographies of identity, In B. Graham and C. Nash eds., *Modern Historical Geographies*, Prentice Hall, 2000, pp. 70-99. [註記④・章註⑥参照] B. Graham and P. Shirlow, The Battle of the Somme in Ulster: memory and identity, *Political Geography*, 21, 2002, pp. 881-904.
- ④ B. Graham, The past in place: historical geographies of identity, p. 75. 前掲註⑥参照。
- ⑤ 例えど、C. W. J. Withers, *Geography, Science and National Identity: Scotland since 1520*, Cambridge University Press, 2001. 英文、T・ウィニチャクン（石井米雄訳）『地図がこつこつたタイ——国民国家誕生の歴史——』明石書店、二〇〇三年。
- ⑥ 千田稔『邪馬台国と近代日本』、日本放送出版協会、二〇〇〇年。
- ⑦ 例えど、大城直樹「地域アイデンティティと歴史意識の交錯と変容——沖縄における歴史修正主義に関し——」（『郷土』研究会編『郷土——実践と表象——』、嵯峨野書院、二〇〇三年）二四八―二六七頁。
- ⑧ 例えど、G. Smith and P. Jackson, Narrating the nation: the 'imagined community' of Ukrainians in Bradford, *Journal of Historical Geography*, 25, 1999, pp. 367-387.
- ⑨ 福田珠己「地域を展示する——地理学における地域博物館論の展開——」、『人文地理』四九巻五号、一九九七年、四四二―四六四頁。同「博物館で語られた『地域の昔』——『宮市博物館の事例から——』」、『人間科学論集』三〇号、一九九九年、一一―二五頁。また野外展示的な博覧会や記念行事も、類似の性格を帯びる。C. Nash, *Historical*

- geography of modernity. In B. Graham and C. Nash eds., *Modern Historical Geographies*, Prentice Hall, 2000, pp. 70-99. [邦訳註 | 章注 ⑨参照]
- ⑩ M. Kurtz, Re/membering the town body: methodology and the work of local history, *Journal of Historical Geography*, 28, 2002, 42-62.
- ⑪ R. Jones, Foundation legends, origins gentium, and senses of ethnic identity: legitimizing ideologies in medieval Celtic Britain, *Environment and Planning D: Society and Space*, 17, 1999, pp. 691-703. D. C. Harvey and R. Jones, Custom and habitus: the meaning of traditions and legends in early Medieval western Britain, *Gegyfisika Annaler*, 81B, 1999, pp. 223-266. D. C. Harvey, Continuity, authority and the place of heritage in the medieval world: a study of identity in west Cornwall, *Journal of Historical Geography*, 26, 2000, pp. 47-59. D. C. Harvey, Constructed landscapes and social memory: tales of St Samson in early medieval Cornwall, *Environment and Planning D: Society and Space*, 20, 2002, pp. 231-248.
- ⑫ 福田珠己「地域の展示と『私たち』の生成」〔郷土〕研究会編『郷土——表象と実践——』、嵯峨野書院、二〇〇三年）六八―八六頁。同「博物館資料目録のもう一つの読み方」（徳島博物館研究会編『地域に生きる博物館』、教育出版センター、二〇〇二年）二〇四―二二四頁。
- ⑬ 笹山めぐみ「地理歴史唱歌としての島本赤彦作『玉川村の歌』——明治三〇年代の長野県における郷土教育の一例として——」、信濃、五一巻五号、一九九九年、三四四―三五二頁。加藤政洋「郷土教育と地理歴史唱歌」〔郷土〕研究会編『郷土——実践と表象——』、嵯峨野書院、二〇〇三年）二六―四四頁。
- ⑭ 関戸明子「群馬県における郷土教育の展開——明治期から昭和初期まで——」、群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）、五一号、二〇〇二年、一三一―一五三頁。同「戦時中の郷土教育をめぐる制度と実践——群馬県師範学校・女子師範学校の事例を中心に——」〔郷土〕研究会編『郷土——実践と表象——』、嵯峨野書院、二〇〇三年）四―二五頁。
- ⑮ 千田 稔「地名の巨人 吉田東伍——大日本地名辞書の誕生——」、角川書店、二〇〇三年。
- ⑯ 上杉和央「十七世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」、地理学評論、七七巻九号、二〇〇四年、五八九―六〇八頁。
- ⑰ 土居 浩「場所と物語——京都の罪人引き廻し伝承を事例として——」、人文地理四八巻四号、一九九六年、三九八―四〇七頁。同「御霊に会う場所——霊性のトボグラフィティ——」（呪術探究編集部「呪術探究1」、原書房、二〇〇三年）二―二四頁。同「トボグラフィティの民俗誌」（岩本通弥編『現代民俗誌の地平3 記憶』、朝倉書店、二〇〇三年）一六四―一七七頁。
- ⑱ 杉本史子「領域支配の展開と近世」、山川出版社、一九九九年、二四九―二八九頁。
- ⑲ この点は羽賀祥二の地誌論から示唆を得た。二章注⑩、羽賀祥二「史蹟論」、二九八―三七二頁。
- ⑳ 岩橋清美「近世多摩地域における『旧記』と『郷土』」、法政大学大学院紀要、二九号、一九九二年、二六〇―二四三頁。同「近世後期における歴史意識の形成過程——武蔵国多摩郡を中心として——」、関東近世史研究、三四号、一九九三年、八―三四頁。同「近世村落における名主の文書管理と『旧記』の作成」、法政史学、四六号、一九九四年、一一八―一三八頁。同「近世社会における『旧記』の成立」、

法政史学、四八号、一九九六年、六四―七八頁。同「近世後期における地域史「範型」の成立」、千葉史学、三二号、一九九七年、五三―六九頁。同「村の由緒の形成と伝播」、日本歴史、六七三号、二〇〇四年、二六―三七頁。

②① 米家泰作「中・近世山村の景観と構造」、校倉書房、二〇〇二年、二一五―三〇五頁。なお本書のはしがきで筆者は、小稿が取り扱うような問題領域を、「歴史地理学的な心性」という言葉で仮に表現した。

②② 森洋久・辻垣見「森幸安の描いた地図」(日文研叢書、二九号)、国際日本文化研究センター、二〇〇三年。奈良国立文化財研究所編「北浦定政関係資料」、奈良国立文化財研究所史料第四五冊、一九九七年。

②③ 上杉和央「近世における浪速古図の作製と受容」、史林八五巻二号、二〇〇二年、一五七―一九七頁。堀健彦「越後古図について——古地図に見える前近代の新潟像——」(小林昌二代表「前近代の潟湖河川交通と遺跡立地の地域史的研究」科学研究費補助金基盤研究 研究成果報告書、二〇〇四年)五九―八六頁。

②④ 山村亜希「南北朝期長門国府の構造とその認識」、人文地理、五二巻三号、二〇〇〇年、二二七―二三七頁。

②⑤ 南部寿樹「今昔物語集にみえる村落神話について」、米沢史学、一六号、二〇〇〇年、二〇―三三頁。

②⑥ E・W・サイド(板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀士訳)『オリエンタリズム』、平凡社、一九九三年、上巻二二〇頁。

②⑦ D. Gregory, Between the book and the lamp: imaginative geographies of Egypt, 1849-50, Transactions of the Institute of British Geographers, 20, 1995, pp. 29-57. なお次の論文も参照のこと。D. Gregory, Imaginative geographies, Progress in Human Geography, 19, 1995, pp. 447-485. [湯山健一・大城直樹訳「心象地理」] 空間・社

会・地理思想、三三号、一六九―二〇八頁] D. Gregory, Scripting Egypt: Orientalism and the cultures of travel, In J. Duncan and D. Gregory eds., Writings of Passage: Reading Travel Writing, Routledge, 1999, pp. 114-150.

②⑧ A. Godlewska, Map, text and image, the mentality of enlightened conquerors: a new look at the Description de l'Égypte, Transactions of the Institute of British Geographers, 20, 1995, pp. 5-28.

②⑨ T. Ploszajski, Historiographies of geography and empire, In B. Graham and C. Nash eds., Modern Historical Geographies, Prentice Hall, 2000, pp. 121-145. [邦訳註「章注⑥参照」] なおオーストラリアの観光絵はがきが、時間の流れが止まったフロンティアと「原始人」のイメージリーを今なお再生産しつつあることを、G. Waitt and L. Head, Postcard and frontier mythologies: sustaining view of the Kimberley as timeless, Environment and Planning D: Society and Space, 20, 2002, pp. 319-344.

③⑩ P. Guffudd, D. T. Herbert and A. Piccini, In search of Wales: travel writing and narratives of difference, 1918-50, Journal of Historical Geography, 26, 2000, pp. 589-604.

③⑪ H. Lorimer, Ways of seeing the Scottish Highlands: marginality, authenticity and the curious case of the Hebridean blackhouse, Journal of Historical Geography, 25, 1999, pp. 517-533.

③⑫ 内田保廣「僻地探訪・『東遊雑記』と『西遊雑記』」国文学解釈と鑑賞、五五巻三号、一九九〇年、一一五―一二八頁。田子修「『秋山記行』——秘境探訪録——」国文学解釈と鑑賞、五五巻二号、一九九〇年、一四二―一四六頁。板坂耀子「江戸の旅と文学」ベリカ社、一九九三年、二二七―二〇〇頁。藤科勝之「近世における地方観・方言観の一端——紀行における事実と虚構の視点——」(白田昭

吾編『道』の文化史——景観・旅・交流——、おうふう、一九九五
年）一二七—一五八頁。

③③ 樫村賢二『愚か村』とされた村——茨城県久慈郡水府村安寺・持
方について——、歴史民俗資料学研究、二〇、一九九七年、八五—
一〇九頁。同『秋山記行』と愚か村話、信濃、五一巻一、一九九
九年、二九—四三頁。

③④ 米家泰作『文化十一年、落人伝説への旅——『蕨生の山つと』をめぐ
って——』（石原潤編『農村空間の研究 上巻』、大明堂、二〇〇三
年）二四八—二六六頁。

③⑤ 岩田重則『民俗学と近代』、日本民俗学、二二五号、一九九八年、
六一—六六頁。

③⑥ 柳田国男『後狩詞記』（『柳田国男全集 五』、筑摩書房、一九八九
年）一六頁。初出は一九〇九年。

③⑦ 赤坂憲雄『山の精神史——柳田国男の発生——』、小学館、一九九
一年、および、村井紀『南島イデオロギーの発生——柳田国男と植
民地主義——』、岩波書店、二〇〇四年、を参照。

四 おわりに

人が「過去」を想起する時、それが特定の土地や場所との関わりから全く離れたものとなることはありえない。どのよ
うな出来事も特定の空間で起こるものであり、あらゆる歴史はどこか特定の場所の歴史としての側面を帯びる。「過去」
を想起することは、往々にして特定の空間を思い描くことであり、ある地理的な場を思い描くことは、しばしばその場の
記憶や経験、歴史的知識の想起を伴う。歴史的な意識と場所の感覚は、本質的に分かちがたい関係を、しかも非常に複雑
な関係を、取り結んでいるのである。

③⑧ 大城直樹『ナショナルリズムと『民俗』の風景——八重山の御嶽のエ
ピソード——』（大城直樹・荒山正彦編『空間から場所へ』、古今書院、
一九九八年）一四四—一六一頁。

③⑨ 小島邦江『柳宗悦の足跡と産地の地図化——『日本民藝地図屏風』
の成立を中心に——』、人文地理、五三巻三、二〇〇一、二二〇—
二四七頁。同『昭和初期に記述された郷土と手仕事——山陰の民藝運
動と牛ノ戸窯を事例として——』（郷土研究會編『郷土——実践と
表象——』、嵯峨野書院、二〇〇三年）四六—六六頁。

④⑩ 濱田琢司『産地変容と『伝統』の自覚——福岡県小石原陶業と民芸
運動との接触を事例に——』、人文地理、五〇巻六、一九九八年、
六〇六—六二二頁。同『維持される産地の伝統——大分県日田市小鹿
田陶業と民芸運動——』、人文地理、五四巻五、二〇〇二年、四三
—四五一頁。濱田琢司『地域文化としての民芸の発見——民芸運動
に価値付けられたやきもの産地——』、文化学年報、二三号、二〇〇
四年、一〇九—一四〇頁。

小稿では、このような視点に立った「過去認識の歴史地理学」の成果について、前半（二章）では特定の具体的な景観や場所をめぐる諸研究について、後半（三章）ではより広域な空間をめぐる歴史／地理的表象、あるいは「場所の物語」を、雑駁ながら概観した。他にも触れることができなかった重要な論考が残されていることと思うが、それはひとえに筆者の文献調査の不備によるものである。しかしながら、今回は近年の「過去認識の歴史地理学」のおおよその動向を概観しえたことで、ひとまず満足しておきたい。

結びにあたり、小稿から派生する三つの課題を挙げておきたい。

第一に、小稿の扱った問題領域は、明らかに歴史地理学者のみが排他的に論じている領域ではなく、優れて学際的な領域となっている。「景観」や「場所」という視点は、歴史地理学にとつて基本的な意義があるものの、多くの分野において共有されていることも事実である。人文地理学全体、とくに文化・社会・政治地理学との連関のなかで、より大きな位置づけが可能となる筈であるし、歴史学その他の諸分野における歴史意識や記憶の問題と小稿は大きく重なる面がある。その点に踏み込めていないことは、小稿の大きな欠点である。^①

しかしこのような学際性は、地理学と歴史学が異種混交するところに成立する歴史地理学の折衷的な性格の表れだともいえる。小稿の扱った問題意識は、歴史地理学者や歴史地理学を志す人々にとつて、歴史地理学を実践する自身の心性に直接関わってくる事柄であり、歴史地理学という営みそれ自体のエピステモロジーを考える際に、避けることのできない地点となるように思われる。

第二に、景観や場所を通じての「過去」の表現は、直線的な時間の流れを表現するわけではなく、むしろそれを遮断し、過去の異なった時間をモザイク状に併置する作用を持つ。M・クラングとP・S・トラヴローは、アテネを訪れた小説家フローベールの記述を素材として、特定の場に複数の時間の「過去」が付与されること、そして質的に異なった時間が空間的な配列を掻き乱すことを指摘している。「過去」を表現する景観は、当然ながら必ずしも時代順に並んでいるわけ

もなく、また一つの景観に複数の時代が託されていることがあるからである。また見る側も、同一の景観に対して全く同一の時期の「過去」を想起するわけではない。

N・ジョンソンは、アイルランド観光局の戦略を取りあげ、歴史が空間化された筋書きに従って配置されるために、時間の流れは失われ、「時間は場所によって跡形もなく拭い去られる」と言う。歴史や記憶は景観や場所に体现されることによって、秩序づけられると同時に、時間の秩序は逆説的に乱され、あるいは希薄なものとなるのである。これは歴史を場所や景観を通じていわば「空間化」する際に、必然的に生じる作用であるが、そのような時空間を体験することの意義について、いつその理解と検討が求められる^④。

第三に、「場所の物語」は、柳田国男の伝説論が指摘しているように、伝説や口頭伝承という形で特定の地物にまわりつく段階から、文字化され、考証を受けることを通じて、複雑な形で編成を受け、変質を遂げる。この指摘は、大城直樹による「場所感覚」の議論に通底する所があると筆者には思える。大城は、一九九四年の段階で「場所と場所感覚が時間性ないし歴史性を帯びている」ことをはっきりと指摘しているが、その際、人文主義地理学の議論に依拠しつつ、二つの場所感覚の違いを論じているのである^⑥。

大城は、自己と場所との間に距離を置き、その場所を対自的に表象する段階、つまり「場所の意識化」が行われている段階をもって、「場所感覚」(sense of place)が備わった状態とし、そこに近代的なるものを見いだそうとしている。それに対して、場所との距離を意識することなく、自己が場所に帰属しているということを考えることもなく知っている状態は、場所に「根ざしている」(rootedness)状態として措定されるという。この後者の状態においては、対自的、意識的に「場所の物語」を表象する——例えば文字に書き留めることや、記念碑を築造すること——はありえないことになる。

したがって、史料や具体的な景観を手がかりとする歴史地理学にとって、この後者の場所に「根ざしている」世界は、手の届きにくいところにある。小稿で取り扱った歴史地理学の諸研究のほとんどは、「場所感覚」が備わった、より近代

的な形の営みを取りあげたものであったといえる。しかしその前段階として、より原初的な場所感覚のあり方が措定されることに留意しておくことは、「過去認識の歴史地理学」にとつて、より根本的な意義をもつものと思われる。外部の第三者によつて記録された伝説や伝承を手がかりとすれば、そのような世界に対してもアプローチしうる可能性は残されているだろう。その上で、「場所の物語」や歴史／地理的の表象がもつ近代性を取り出していくことは、歴史地理学という営み自体の内省にも繋がっていくように思えるのである。

① 大平晃久は「場所」の構築をめぐる地理学・歴史学・人類学の議論

を概観し、「場所」研究と歴史学の記憶論の論点がかなりの程度一致していることを確認している。大平晃久「場所をめぐる構築主義的アプローチの可能性」東海女子大学紀要 一三三号 二〇〇四年、七三～八三頁。

② M. Crang and P. S. Traylor, The city and topologies of memory, *Environment and Planning D: Society and Space*, 19, 2001, pp. 161-177.

③ N. Johnson, *Historical geographies of the present*, p. 265. 一章注

⑩ 参照。

④ M. Crang, On the heritage trail, maps of and journeys to Old England, *Environment and Planning D: Society and Space*, 12, 1994, pp. 341-355.

⑤ 柳田国男「伝説」(柳田国男全集七)、筑摩書店、一九九〇年)七一～一五五頁。初出は一九四〇年。

⑥ 大城直樹「墓地と場所感覚」、地理学評論、六七A巻三号、一九九四年、一六九～一八二頁。

【付記】 小稿の主題に関連した小さな研究会において、刺激的な議論とアドバイスを与えたくれた土居浩氏、および堀健彦、山村亜希、上杉和央の諸氏に感謝したい。なお脱稿後、森正人「節合される日本文化と弘法大師——一九三四年の『弘法大師文化展覧会』を中心に——」、地理学評論、七八巻一号、二〇〇五、一～二七頁、および大平晃久「対立する記憶と場所——小港町・香川県汐木をめぐる歴史意識——」、歴史地理学、四六巻五号、二〇〇四年、二五～三九頁、に接した。いずれも小稿の視角に関わる地理学の論考である。併せて参照されたい。

(京都大学大学院文学研究科助教授)